



TITLE:

<批評・紹介> 内藤虎次郎著「支那史學史」

AUTHOR(S):

宇都宮, 清吉

CITATION:

宇都宮, 清吉. <批評・紹介> 内藤虎次郎著「支那史學史」. 東洋史研究
1951, 11(2): 172-176

ISSUE DATE:

1951-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138917>

RIGHT:

批評・紹介

支那史學史

内藤虎次郎著

昭和二十四年五月二十五日、東京弘文堂發行

A 5 判

六五六頁

定價 七〇〇圓

内藤博士の大著支那史學史を批評紹介するという大役がまわつてきた。これは大そう名譽なことである。しかし、正直にいつて、わたくしはまだこの本を全部は讀みきつていない。やつと第九章「宋代における史學の進展」まで、すゝむことができたのである。だが、この大著で博士がもつとも力をいれもし、得意でもあつたらうと考えられるのは、むしろその後半、近世史學史に關する部分であると見られる。それは本文五百八十四頁にも及ぶ中で、近世史學史に關する部分は、ほとんど半分にも近い大量をしめていることでもわかる。だから、この部分を精讀しないで本書を批評したり紹介したりすることは、ほんとは誠實な態度とはいえないのだ。しかし、いままで讀んだところの中にも、いくらかわたくしなりに感じたこともあるので、それを二三しるして見たいと思うのである。

わたくしはすでに、十五年もまえから、本書の出版せられる日を待ちどおしく思つていた者である。なぜなら、わたくしは當時から、中國の歴史を研究する學徒として、「中國人の史學そのものに對する傳統的な考え方と展開がどんなものであつたか？」という問いは、中國史の史實の探究と表裏して、絶対にきりはなしては考えられない重

要な問題であると思つていた。しかし、それにもかゝわらず、このことはなかなか容易な仕事ではなく、わたくしは全く方途にまよつていたのである。そして、これはどうしても博士のような、大體をするどく見とおす、天才の指導にまづよりいたしかたないと思つていたからである。ところでこの本は、博士が生前みづから何度かその出版を豫告もせられたし、また御自身で學生たちの筆記したノートをもととして朱ふでをいれていられるということを聞きおよんでいた。そのことは、博士がいかに本書に關心をもたれ、また自信にみちてもいられただかをしめすものである。わたくしは、それを聞くにつけても、一日も早くこの天才の努力の結晶と自信の作品のすがたを見たいとねがうのであつた。だが、この本はついに、博士の在世中にはあらわれず、ようやく博士が世をさられて十數年の今日にして、はじめて世にその巨大なかたちをあらわしたのである。

この本は博士の一九二〇年代における大學のレクチュアによつて作られたものだが、博士のレクチュアは獨特なものであつたらしく、草稿がなかつたため、その整理には學生が筆記したノートによるほかなく、しかもそれは決して容易な仕事ではなかつたのである。この困難な仕事がついに實をむすんだのは、志に厚い令息乾吉教授や神田喜一郎博士の尊敬すべき努力のたまものであつた。わたくしが、かつて臺北大學の神田博士の研究室で、「これが内藤先生の史學史のノートですよ」といつて、その一部分に朱筆のびつしり入つた原稿を見せていたとき、*「あゝこれが出版せられるのは、まだまだだなあ！」*とつくづく思つたことをおぼえている。それからさらに數年、かののろわしの戦火を無事にくぐつて、今日ついにそのりつばなすがたを見ることができるようになつたのは、眞にたとえるにものなきよろこびで

あると思う。

この本が出版せられるとすぐ、いくつかの書評があらわれた。現在わたくしの知っているものだけでも三つはある。史學雜誌第五十九巻一號には、博士の高弟の一人岡崎文夫博士が堂々四百字づつ二十五枚にもおよぶ、ガツツリした内容的な批評紹介を書いている。岡崎博士は中國中世史の研究において、内藤博士のメソッドを忠實に、かつみごとに祖述し發展させた學者としてみとめられている。だから、その批評紹介はさすがに深い理解と内的なしたしみのあふれたものである。史林第三十三巻一號には、同じく博士の門人の一人貝塚茂樹教授が批評紹介のふでをとつている。この學者は中國古代史の分野において、内藤の手法をうけつぎ、さらにそれを發展させた人であり、内藤的手法の根本方式について、すぐれたつかみ方をしめし、岡崎博士のそれとともに、本書をよむ者に對し、きわめてよい案内記をなしている。だから本書の讀者は、その開卷に先だつて、これら二人のりつばな批評紹介を見られるならば、その理解を一そう深くすゝめることができるであらうと思う。歴史學研究第一四三號にも、まつしまえいち氏が、短文ではあるが、紹介文を書いている。内容に關しては大したこともいつてはいないけれども、大戦後おこつてきた新史風の中に活動する、尖兵の學者が特に本書の出版を紹介していることは、センスを重んずる史學者として當然のこととはいえ、なみなみならぬ意味をみとめてよいと思う。たしかに本書は最近の學界にあらわれた、いくつかの價值ある書物の中でも、第一級に屬する名著の一つだといつていゝだろう。

博士がこの本の基となつた支那史學史のレクチュアをせられたところは、實は高い水準にあると内外の學者のひとしくみとめていた日本の

シノロジー界にも、シノロジー専門のシステムチックな書庫とその完全な目録とは、いまだ必ずしも完備しているとはいえない。ありさまだった。いわゆる漢學に役立つ範圍内において、傳統的手法でシステムタイズされた書庫はいくらかあつたのは事實だ。けれども、それは決してそのまゝに近代的中國史學に役立つ書庫とはいへなかつた。そうした時代に博士は、近代史學の目から見ればカーオスにさもにた、かの中國書籍の海の中から、中國的史學の精髓を理解し、その論理とシステムと、その展開のあとをつかみだすことを試みられたのであつた。博士はその一生をかけて、みづからさがし、みづからたどり、そしてみづからの頭腦によつてそれらを組織化することに努力せられた。しかもそれは實にみごとな成功をおさめているといえる。なるほど、それは今日のわたくしたちが求めているような史學史とは、かなりちがつたものであることはたしかである。だが、日本やヨーロッパのシノロジーはむろんのこと、中國においてさえ、いまだ誰人もこゝろみなかつたことを、一九二〇年代のシノロジーの水準において完成せられたことは、やはり何と一つでも偉業であるといえよう。それは内容的にいえば、傳統的な中國目録學のシノロジー的發展であり、システムチックな再構成である。博士は中國の目録學を解體して、あらためて、近代的史學の批判的精神に立つてその史學史を再構成せられたのであつた。わたくしは博士の支那史學史を讀もうとする人に、こゝで特に注意したいと思うことがある。それはこの本が、このようにして成立しているものだから、そこにはどこまでも目録學の本姓といふものが色こくあらわれている。だから、本書のいうことをより一そうよく理解し、そのシステムをより深く知ろうとするなら、讀者はよろしく本書をたづさえて完備したシノロジーの書庫に入り、博士と

もに中國史學史發展のあとを再體驗すべきであるということである。

内藤博士の支那史學史は、このような中國傳統の目錄學的性格を色こくもつている點で、まさにどこまでも傳統的シノロジーの限界にとどまるものではある。今日では、もはや誰人といえども、再びこのようなシステムと形式をもつては、支那史學史を書きはしまいし、書くこともできないであらう。たゞこの本は一九二〇年代以前の傳統的シノロジーにおいては誰人も試みなかつたし、また試みることもできなかったことを、博士が試みてみごとに成功している點がまことに偉大である。この限りでは本書は傳統的シノロジーの最高の傑作であり、他人のまねることをゆるさない完成品である。そして、今にして思えば、博士の胸の中に多年にわたつて、この史學史のプランが成熟しつゝあつたればこそ、一方ではかの獨創的な内藤の中國史學の幾多の論文も生れることができたのであつたのだ。

この本のもといとなつたものは、まえにもいつたようにレクチュアの筆記であるが、しかもなおよく、音に聞く博士のめいせきな頭腦と、その獨特なならかな調子とが生々とおられてゐる。それは實にやさしい文章である。どこにもこわばつたかたくるしさが見えず、傳統的シノログたちにつきものの孤高の難解さというものがない。しかしそれなら、だれにでも一息によみきれれる軽さがあるのかというと、それは全く反對である。學者でない人はむろんのこと、たとえどんな學者でも、この本が一氣によみとおせるものではない。この本がよみきれれるためには、まずそれだけの用意がいるのだ。それはシノログとしての相當に高い教養が必要だということである。つまり、かつて存在したシノロジーの強くて深い傳統によつてつちかわれない人にとつては、この本の難解さは、オープン・シサミをわすれたカシム

君の困迷と同じだ。そして今日では、この種のカシム君が必ずしもすくなくはないということである。こゝにこの本のもつ重要な歴史的意思がひそんでいいると思ふ。

博士の支那史學史のレクチュアがおこなわれた一九二〇年代には、まだ日本の文化構造のあらゆる斷面には、中國文化的あり方というものが色こくあらわれていた。いわゆる漢學的教養というものは、こつけいにも近いきまじめきで、いたるところにこつてつていた。この意味で中國的文化はそのころの日本では一つの普遍的教養であつたといつていゝだろう。人々は家庭の両親の口から、學校の教師の手から、社會におけるエテケットから、傳統的な中國文化の所産をひろいあげて身につけていた。かれらはそれを當然のことのように、自分自身の持ち物だと思つていた。だからそのころの大學生が大學で内藤博士などから、突如としてこの深く結構された、しかもまた、傳統的な意味において非常に高いシノロジーの水準にある、支那史學史を聞いたとしても、かれらはほとんど苦しむことなしに、このレクチュアを理解することができたと思われる。博士がなにげなしに使つてゐる表現！ こともなげに引用する文獻！ 傳統的なシノログ的用語！ 無數の術語！ シノログ的世界の特異なアトモスフェアと學問的契約！ 當時の大學生はこうしたものをも博士に出あうまえにすでに、いつとはなしに身につけていたのであつた。だから、かれらはこのすばらしいレクチュアを聞いて、それをきわめてすなおにうけとることができた。そして、その後の十數年間、かれらの學問的進歩において、どれほどの深い學恩をうけたことであらう。わたくしは博士に教えをうけた、多くのすぐれた人々を見るにつけても、このことを強く思わないわけにはいかない。

だが！いまや事情はすっかりかわつてゐる。現代の大學生は、おそらくこの本を容易にはよみなせまい。また、この本に書かれてゐるような世界への直接的なインテレストを感じさせることさえ容易ではないだろう。かれらの學力が低下したところのか？ それもあるかも知れない。だが問題はもつと深いところにある。かつては勝義において文化だと考えられていたもの、東洋人のほこりのみなもととなつてゐた精神文明、そして日本社會のすみずみまでを色どつてゐた中國的なるものの一切！それはいまや急速に過去化し、忘却のかなたへ追放せられつゝあるためだ。かつては害毒でさえあるようにありあまつていたものが、いまやくすりにしたくも見つからないまでに、どこかへいつてしまつたのだ。かれらはもはや中國的な漢字を知らない。かれらはもはや漢文學的美文に興がらない。意味もなく東洋的だといつて愛せられた、やぶれぼうしに高げたの青年はすがたをけして、詩ぎんはたしかにバカ氣た藝術であることがみとめられた。七尺去つて師のかげをふまず、男女七歳にして席を同じくしなかつた道はやぶれて、男といわず、女といわず、人間の名において生活權を主張する學徒は團結した。かれらは、いけないものの即封建的だと考え、封建的なものは即孔子教だと宣言した。歴史的なものとしての、中國的なものは、もはやかれらにとつては「いとうべきもの」以外の何ものでもなかつた。そしてこれは、善惡を絶したひやゝかな現實なのだ。これは抵抗したい歴史的事實の力なのであつて、もはや防壁とか善導とかいうことが可能な事態とは本質的にちがうのだ。

かくして、いまやシノロジーもまた必然的に、あらためてその本質が問われ、それ自身の新しい基礎とメソッドが要求されつゝある。それはむしろ世界的潮流なのであつて、決してひとり日本のみの現象で

はないのだ。かつては花やかであつたヨーロッパのシノロジーも、いまでは、その傳統的地盤さえゆらいでゐる。アメリカやソヴィエトでは、かつてのシノロジーとは似もつかない明確なイデオロギーに立つ手法が新興しつゝある。それはもはや、いかなる意味においても、十八、九世紀のシノロジーの色あいを脱したもので、一切の感傷主義をかなぐりすてた、無慈悲にして非情ともいふべき現代的科學のメスが、中國の社會と經濟と政治と文化とを解剖しようとしてゐるのだ。シノロジーの故郷中國でも、一應は民族主義的學問として、近代的よそおいをまといつゝ立ちあらわれた「國學」も、それ自身としては、もはや没落のほかないはめに追ひこまれてゐるといえるであらう。總じていえば、傳統的シノロジーはその歴史的社會的經濟的したがつて文化的地盤とともに、くづれさりつゝあるのだ。

かくして、傳統的シノロジーの意味における内藤博士の支那史學史を直接的に理解し、愛讀しようとする學生たちもまた、世界的潮流の中において一應その歴史的社會的地盤とともに亡びさりつゝあるといえる。しかしわたくしは、こゝでわが國のシノロジーが亡びるであらう、ということをつてゐるのではない。いな！わが國のシノロジーは内藤博士の支那史學史を直接的には理解できなくなつた學生たちによつてこそ、かえつて新しい地盤と使命と手法とを作りあげられるにちがいないと思う。かれらは科學的なこくめいさで、かつてのヨーロッパ人がやつたと同じように、中國文字を一字一字學ぶであらう。かれらは傳統的シノロジーが多くそうであつたような遊戲的氣分からではなく、もつとプラグマチックな目的から、能率的、組織的な手法で、あらゆる中國文をマスターするであらう。そして、かれらは新時代のイデオロギーによつて、根本的に歴史的中國を考えなおすであら

う。けだし、中國に關するあらゆる問題は、かつての傳統的シノロ
グが問題とした以上に廣く深い人間的、世界史的問題として提出せら
れているのだし、それはさけることのできない生活上の重大問題とし
て、新生日本の青年に課せられた課題であるからだ。

かれらはこのばあい、この新シノロジーから必然的要求に媒介せら
れて、はじめてかつての傳統的シノロジーの所産に接するであらう。
たゞかれらが是非とも必要なものとしてえらぶのは、必ずやクラシッ
クとしての價值高いものだけに限られるであらうことはいふまでもな
い。かくして、あらためて深き尊敬をあつめつゝ、この新シノロジー
界に登場してくる幾つかのクラシクの先頭にたつ書物こそは、うた
がいもなく内藤博士の支那史學史であると思われる。それは傳統的シ
ノロジーの數ある所産の中にも、ならぶものなき完成度をしめしてい
る文字どおりのクラシクだからである。それは司馬遷の史記が中國
史學における永遠のものであると全く同じ意味において、中國史學史
における永遠の作品であるからだ。新しいシノログたちは、うたが
いもなく、この支那史學史にみちびかれつゝ、ついには傳統的シノロ
ギーの國をつぎぬけて、新シノロジーの世界へとみづからを展開す
るにちがいない。

内藤博士の支那史學史の眞の存在價值はこの意味で、まさにこれか
らの新シノロジーの發展にかかつているのであると思ふ(宇都宮清吉)